

## 資料紹介

## 思想家の研究雑誌

杉原四郎

## はしがき

本稿は、本誌第48巻第1号（1998年6月）に載せた拙稿「思想家の研究雑誌」の続稿である。今回もⅠで日本の思想家（6人）についての雑誌、Ⅱで外国の思想家（6人）を対象とする雑誌を、人物の出生年順にとりあげて、むすびで若干の補足をすることにしよう。

1960年代にはじめた私のこの研究によってつぎのことが明らかになった。(1)日本で思想家の研究雑誌が発行されるのは、福沢諭吉や徳富蘇峰など戦前でも見られるが、外国人の思想家を研究した雑誌もまた、戦前すでに『トルスイト研究』（1916—1919）や『レーニン研究』（1931—1932）のように存在した。(2)戦後にはこの種の雑誌の発行は質的にも量的にも次第に増加し、河上肇や柳田国男などのように、同時に何種類かの雑誌が並行して発行されることもあった。(3)雑誌によっては最初から10号で休刊乃至廃刊すると予定したものや、種々の事情で結果的に短期に消滅する（所謂三号雑誌）ものもある反面、新しく登場して脚光をあびる人物をとりあげたり、従来省られなかった人物をわざわざ発掘して研究する特志の個人雑誌があらわれるなど、時代とともに有為転変をかさねてゆくことは、この種の思想・学術雑誌といえども雑誌というメディア一般のもつ宿命を感じさせるものがある。

## Ⅰ

以下の6人については、すでにとりあげたこと

のある賀川豊彦、河合榮治郎や佐多稲子のような場合もあるが、他の3人は、ここではじめてとりあげる雑誌である。

## (1)賀川豊彦（1888—1960）

賀川に関する定期刊行物は、学術研究の雑誌と記念館の実践活動の現状報告の雑誌と2種ある。前者については私はこれまで『賀川研究』（横山春一編）と『賀川豊彦研究』（本所賀川記念館）と『賀川豊彦学会論叢』（賀川豊彦学会、創刊号、1985年）とを『思想家の書誌—研究ノート』（日本アソシエーツ、1990年、155、181頁）で紹介した。つぎで紹介するのは『賀川豊彦研究』の最近版である。

第39号は1999年10月発行された。従来は年3回発行されていたが今後年2回発行となる。年間講読費1200円。編集同人雨宮栄一、戒能信生、斉藤宏、高崎芳輝、服部榮、雨宮延幸、発行人雨宮延幸。第39号は26頁で、巻頭言として高崎芳輝が「賀川豊彦の再認識」を書き、「賀川の言動には欧米流のパフォーマンスを重んじることが多く、誤解を生む原因にもなった。私は賀川の創設した東京の下町のスラムの伝道所に勤め、最晩年の彼に親しく交わる機会を与えられたが、根本的には『一途の人』であったと感じている」とのべている。また雨宮栄一「賀川豊彦と大杉栄」は、二人の生涯を対比的に辿りつつ、二人は全く対立的な思想の持主だととられているが、その本質において共に生物学的世界観を共有する理想主義者であったとし、両者は互に他を理解していたことを数々の出会いや両者の著書で立証した長編の力作である。

また実践活動に関するレポートとしては『本所賀川記念館レポート』(30号, 1999年7月10日)や『ボランティア(賀川記念会だより)』(70号, 1999年12月15日, 発行者神戸市中央区吾妻通5-2-20, 村山盛嗣)があり、『思想家の研究雑誌』(本誌48-1)や「特定の思想家を主題とする研究雑誌目録拾遺(続)」(『社会思想史研究』15, 1991年)で紹介したが, このほかに東京の賀川豊彦記念・松沢資料館からも『資料館ニュース』(第1号, 1981.8)が出ているが詳細不明である。

## (2)河合榮治郎(1891-1944)

河合榮治郎については『河合先生追悼録』(1945年?)と『河合榮治郎 伝記と追想』(1948年)を以前紹介した(『思想家の書誌』, 10-11頁)が, 最近その研究雑誌が出ていることを知ったので紹介する。

『河合榮治郎研究』, 平成9(1997)年度, 平成9年11月1日, 発行者社会人大学出版部, 事務局東京都文京区小石川3-19-14, 株式会社コグレプリント内, 責任者川西重忠 78頁, 頒価千円。

川西の「はしがき」によれば, 研究会が生れて15年, 河合の著作に読者として共鳴したかあるいは学生時代直接に教えをうけた直弟子が中心に発足, 長い細々とした歩みが「この数年にわかに活気付いて……同窓会的で仲良しクラブ的な雰囲気から徐々に変化がみられ」若手会員の本格的な研究発表が見られるようになったと書いている。また川西の第3号編集後記によれば, 本誌は第1号が1985年7月, 第2号が88年2月に出て, その10年後にこの第3号が出たことになるが, その間に1994年に河合没50周年記念集会在盛大に行われたこと, 1997年5月に外山茂が逝去し, 本号はその追悼号ともなったこと, 現在の研究会の年中行事は2月の墓参, 6月の総会, 11月の研究発表会の年3回であることをのべている。

第1部 1996年度研究発表論文, 共通テーマ河合榮治郎の現代的意義。

- (1)「河合榮治郎のイギリス留学」 山下重一
- (2)「河合榮治郎の『職能』的自由論」 角田克己
- (3)「河合榮治郎の労働問題研究」 松井慎一郎
- (4)「河合榮治郎は日中戦争をどう見たか」 大杉一雄

## 第2部 外山茂先生追悼特集

- (1)「畏友外山茂君を追悼して」 関嘉彦
- (2)「外山茂先輩を偲ぶ」 井上信一
- (3)「文人独り去り給う」 渡辺長雄
- (4)「中央銀行の理論的支柱」 東忠尚

第3部 会員発表(1996年11月「河合榮治郎の今日的意義」)

- (1)「河合榮治郎先生の忘れ得ぬ思い出」 山下信庸

- (2)「何故いま河合榮治郎か」 平井孜子

第4部は会員だよりで満上健良と山上信庸の川西宛書簡あり。第5部は活動報告で, 1996, 1997年の研究発表のプログラムや発表者の写真, 墓参会や没後50年記念集会の写真がある。

「何故いま河合榮治郎か」を発表した平井孜子は Atsuko Hirai, *Individualism and Socialism: The Life and Thought of Kawai Eijiro (1891-1944)*, Harvard University Press, 1986 の著者で, その内容については私の書評(『経済研究』一橋大学経済研究所, 39-4, 1988, 10, 杉原『日本の経済思想家たち』, 日本経済評論社, 1990年に収録)にゆずる。平井は報告の中で「河合榮治郎と丸山眞男が近代思想に対して, そしてある重要な点においてマルキストに対する戦いの上での仲間であった」と指摘している。なお最近の河合研究の注目すべき労作として, 個人主義のアプローチによる日本のマルクス主義と国家主義とに対する河合の思想史的批判と, 近代日本にあって稀に見る強靱な理論化が企図された河合の政治思想の戦時期に到る軌跡を分析した岩本典隆『近代日本のリベラリズム』(文理閣, 1996)をあげておこう。

## (3)佐多稲子（1904—1998）

『くれない——佐多稲子研究——』の第1—6号（1969—87）については『思想家の書誌』（1990）182頁に紹介した。ここでは第7・8・9号の三冊をとりあげる。

第7号（1990年4月）には7篇の論文と書評1篇、年譜（1979—1989）とがあるが、長谷川啓「戦争中から戦後へ——太平洋戦争期の佐多稲子（下）、女・生活・民衆の再発見——佐多稲子における戦後の起点——」は注目される。

第8号（1996年12月、105頁）には9編の論文と壺井栄から佐多稲子宛書簡と佐多稲子著作初出目録補遺（小林裕子）とがおさめられている。佐多の写真二葉と壺井→佐多宛書簡の写真が挿入されている。

第9号（1999年10月）は1998年10月12日敗血症で94才で永眠した故人の追悼号で187頁。表紙や巻頭、本文中に遺影やお別れ会、納骨式の写真などがある。資料として『くれない』第1—8号の目次、創作ノート「樹影」と来簡リストがおさめられている他、「追悼」に小田切秀雄ら3篇、「エッセイ」に「母も語る——子供時代の思い出（聞き書き）」佐多達枝ら13篇、連載「母と僕と映画あるいはテレビと」（その一）窪川健造、研究ノート「『私の東京地図』ノート」井坂昭夫など二篇が収録、最後につきの論文四篇が掲載されている。

「『夜を背に昼をおもてに』論ノート——婦人民主クラブのことなど——」 北川秋雄

「『扉』論——〈母〉の家の姉弟——」 小林美恵子

「新しい義務から『青春陰影』への改変——運動崩壊後の揺らぎの内実——」 谷口綱枝

「『夏の葉——中野重治をおくる——』論——〈屈折〉・『驢馬』の時間・〈癒し〉——」 矢沢美佐紀

巻末の編集後記に8人の追悼文がおさめられている。編集発行人佐多稲子研究会（川口市前川町4—262—14、五十嵐稲子方。）

私がこれまで紹介してきた思想家の研究雑誌の中では、日本人の女性のものは佐多稲子と高群逸枝との二人であるが、他に女性の研究雑誌として、『多喜二と百合子』（1954年頃）と、『鉄幹と晶子』（上田博編、第5号、1999年、和泉書院）とがあるが、実物未見である。

## (4)新明正道（1898—1984）

『新明社会学研究』は新明社会学研究会（この会は1991年度の文部省科学研究費（3年間継続交付）をうけ（代表田野崎昭夫）で発足）の編集・刊行で、1992年3月に創刊号が出て、第6号が1996年10月25日に発行され、今後しばらく休刊することになった。私の手許にある第5号と第6号とを紹介する。

第5号、1995年9月20日発行、新明社会学研究会編集（田野崎昭夫・山本鎮雄）、事務局川崎市多摩区西生田1—1—1、日本女子大学人間社会学部現代社会学科山本研究室。126頁。

内容は下記の通り。なお「回想」を執筆した四氏は、新明が東北大学を定年退官後つとめた四大学のそれぞれの関係者である。

巻頭に金沢実が「新明文庫の設立にいたる経緯」があり、新明の蔵書が神戸の甲南女子大学に大学院博士課程が設立されたときに所蔵されることになったことがのべられている。なお新明文庫の冊子目録はまだ出ていない。洋書2700冊、和書5800冊で、洋書は英・独・仏の人文・社会科学書で1920年代から70年代のものが多く、戦前はドイツの、戦後はアメリカの社会学の文献が多い。また、文学作品が和洋ともかなり多く、雑誌類はすくないとのことである。論考はつぎの3本。「社会学史研究の方法」河村望、「ベルリン反帝グループと新明正道日記」加藤哲郎、「新明正道先生と東亜連盟」山本鎮雄。

加藤は、1926年末からはじまった在独日本人の若手知識人によるマルクス主義文献の読書会や1930年夏にコルシュ・タールハイマーに学んだ新

明正道を中心とする研究会をのべて、1929年頃に來独した新明正道が当時の在独日本人ネットワークの中で「つとめて『東北帝大文部省在外研究員』、『社会学者』としてたちふるまおうとした」こと、それが「その後の新明の学問と人生にも、よかれあしかれ一つの影を落としている」とかいている。

「シンポジウム」(新明先生の全体像をめぐって、1995年5月20日)はそこでの三つの報告(阿閉吉男、守屋孝彦、中村泰次)の要旨と、これらをめぐる全体討論の記録であるが、とくに中村の「ジャーナリストとしての新明正道先生」が有益で、討論でもこれを中心に展開されている。

「日記」は新明が1936年後半に満鉄社員会の招きで満州各地を講演してまわった記録(7月4日—21日)である。また「回想」は「新明と明治学院大学、中央大学、立正大学、創価大学との関係について」各大学の教授が執筆している。最後の「遙かなる『追憶』にはベルリン時代のアルバムからの写真(杉本栄一、勝本清一郎、服部英太郎も登場)がのっている。

『新明社会学研究』第6号、1996年10月。

「論考」の5論文のうち、「新明正道論への『助走』」北川隆吉、「社会学における理論的立場——学問的一考察——」田野崎昭夫、「新明社会学の論争性について」(秋元律郎)は新明社会学の理論を、他の2つの「新明正道先生の戦前期の時論」(守屋孝彦)、「思想的転換の軌跡」(山本鎮雄)は新明の時論をとりあげている。

「資料」は、新明の「仙台市長選挙戦に参加して——十日間の回顧——」(『志向』1、1962年2月)と新明の地方自治体への関与と都市社会学研究を論じた「仙台革新市政と都市政策実践」(山本鎮雄)をおさめている。また『社会学研究』(1950年7月—1979年5月)に寄せた新明の論文リストや「新明正道書誌」山本鎮雄編があり、巻末に山本・田野崎共編『新明社会学の研究』と山本編・新明正道『ドイツ留学日記』(ともに時潮社、1996

年)の紹介がある。私は京都大学の学生時代彼が京大で行った講演をきき、その頃出版した『ファシズムの社会観』を読んでとくにパレートの社会観の骨子を教えられた記憶がある。彼のドイツ留学の体験の意味をはじめて知ってこの社会学者に新しい関心をいただいた。

#### (5)菅江眞澄(1754—1829)

私は最近菅江眞澄研究会が秋田市で1981年9月に設立され、機関誌を毎年出しているなど活発な活動をつづけていることを知り、その雑誌の最近号を2冊入手したので紹介する。

『菅江眞澄研究』、第40号、1999年12月15日、編集発行菅江眞澄研究会(秋田市寺内児桜81、古四王神社社務所内)。24頁。特集第12回菅江眞澄研究会集。

『『雪の道奥雪の出羽路』を読む』(上) 永井登志樹

「海榴(椿)崎とオグルマの花」 西崎正孝

この講演は共に眞澄の百種二百冊におよぶ絵入り日記を中心とする『遊覧記』によりながら彼の津軽での足跡をたどった解説で、眞澄の作った短歌が多く引用される。そして眞澄とその土地の人々とのあたたかい交流の中に彼の人間性を味わうべきだとのべている。

「内田武志・ハチ兄妹と私」 長沢詠子。

上記の講演の中にも出てくる東洋文庫の『菅江眞澄遊覧記』は内田武志の現代語訳であるが、この労作は眞澄が世に知られるきっかけを作り、更に内田は宮本常一と共編で未来社から『菅江眞澄全集』(全12巻、別巻2巻)や『菅江眞澄の旅と日記』を出して菅江研究に没頭したが、長沢は1966年からはじまった内田との文通を紹介しながら内田が1986年に没するまでの兄妹との交流をのべている。また「眞澄往来」には会員動静が報告されている中で、赤坂憲雄編で雑誌『東北学』が創刊(東北芸術工科大学・東北文化研究センター)され、そこへ田口昌樹「菅江眞澄の旅」が掲載され

たことが報じられている。

『菅江眞澄研究』第41号, 2000年4月30日刊, 26頁。

「『雪の道奥雪の出羽路』を読む」(下) 永井登志樹

「菅江眞澄と徐編の史蹟について」 長崎喜代次

「日本一の富士山——眞澄の訪ねた民間信仰の宝庫——」 田口昌樹

本号には安永稔和の詩集『椿崎やみなんとて』(眞澄関連の第四詩集), ロベルト・F・ヴィットカンプ『日本近世文学の起源について——近世紀行文学と菅江眞澄——』, 神山真浦『菅江眞澄と「友千鳥」』, 田口昌樹『「菅江眞澄」読本』(眞澄が47年間の旅暮らしの中で出逢った有名無名の人々のことがでてくる)が紹介されている。また「刊後録」に「来年は研究会が発足して20周年を迎えます」とあり, 記念講演会, 記念誌の発行などが予定されている。

#### (6)南方熊楠 (1867—1941)

『熊楠研究』第1号, 1999年2月南方熊楠資料研究会編, 事務局松居竜五・守田健一, 連絡先埼玉県飯能市阿須698, 駿河台大学現代文化学部, 松居研究室, 岩田書店(東京世田谷区)発売, 定価2000円(税別), 322頁。

南方関係の定期行物は、『番所山道信』, 『友の会々報』(1990年1月創刊), 『ミナカタ通信』(1996年2月創刊)などがあるが, この『研究』は一般に市販されたものとしては最初である。飯倉照平の「はじめに」によれば, 岡本清造・文枝夫妻の保存してきた南方の蔵書・書簡などの整理が南方熊楠邸保存撮影会によって着手され, 南方熊楠資料研究会がその仕事を手伝うことになった。この調査報告を継続的に出し, 熊楠に関心をもつ人々とのつながりを深めるために, 本誌を創刊, 当面は一年一冊程度刊行しつつ, 「いずれは研究会以外の方々にも参加していただき, 開かれた出版物に

したい」とある。第2号は2000年2月に出た。松居「ロンドン抜書」考(2), 飯倉「熊楠とふるさとと熊野」原田「小田半四郎宛書簡」など14編の論文が収録されている。

創刊号はカバーの表紙に1907年3月13日の南方の日記の一部の写真がのっている。表紙に「南方熊楠の基礎資料の研究, 平成11年2月, 研究代表者松井憲五」とあり, この第1号は1996—98年にかけての文部省の科学研究費の報告書であることを示している。

「南方熊楠資料調査の中間報告」 飯倉照平, 松居竜五, 守田健一

「南方熊楠対長坂邦輔——『珍事評論』の背景——」 武内善信

「土直法竜宛南方熊楠書簡の新資料」 上山春平

「弟常楠宛南方熊楠の手紙」 吉川寿洋

「南方熊楠・平瀬作五郎の松葉蘭の総合研究」 中瀬喜陽

「『ロンドン抜書』考」 松居竜吾

「南方熊楠と大蔵経——・「田辺抜書」以前——」 飯倉照平

「南方熊楠の今昔物語集——明治篇・補遺——」 小峯和明

「テキストとしての南方熊楠——新聞掲載文章の問題点——」 原田健一

「南方熊楠の新聞切抜き」 安田忠典

「南方粘菌学を探る(1)——南方熊楠隠花植物コレクションにおける変型菌標本数の年次的推移——」 荻原博光

「南方熊楠の昆虫記」 後藤博

「熊楠の高等植物の標本(中間報告)」 土永知子

この外に『南方二書』関係書簡, 『和歌山新聞稿』, 南方熊楠文献目録(1)(1980—97年), 原田健一編などの資料関係や, 南方熊楠邸保存顕彰会・南方熊楠記念館の紹介記事があり, 本文中に南方の日記の画(13頁), 田辺抜書の画(83頁, 133頁)が挿

入されている。

第2号も全体として第1号同様資料調査報告の色彩が強いが、単なる資料紹介から解説的研究の色彩が濃いものも含まれているようである。

## II

以下6人のうち、最初の4人ははじめてとりあげられるが、ラスキンとロマン・ロランは以前にも紹介したことがある。今度紹介するのはその後知った2人についての新しい雑誌である。

### (7) グラムシ (A. Gramsci, 1891—1937)

『グラムシ研究会通信』, 第41・42合併号, 2000年1月20日, 京都グラムシ研究会, 京都市右京区南下馬野町4—13, 松田気付。15頁。

最近わが国でグラムシに対する関心が高まっており、『季報・唯物論研究』67・72号は『『獄中ノート』校訂版特集』として刊行されており, グラムシ研究についての種々の刊行書も目立っている。この研究会は設立以来16年目に入る長い歴史をもっているが, この合併号の最初は研究活動紹介で, つぎのような部会活動を行っている。(1)『獄中ノート』校訂版・各国版ワークショップ。(2)方法論部会。これまで「グラムシ・ウェーバー部会」の名称であったものを「社会・人間科学方法論部会」に改めた。今年夏の合宿での藤田博文のフーコー報告, 大関雅弘のJ. レーマンの「ウェーバーをグラムシで読む」という報告を紹介。(3)「サルタン・ノート」研究会。(4)「プハーリン・ノート」研究会。つづいて「グラムシ『獄中ノート』校訂版研究について——鈴木富久氏のコメントに寄せて——」松田博, 「グラムシ最後の草稿についての覚え書」小原耕一の二論文がある。

『LA CITTÀ FUTURA』(未来都市), 東京グラムシ会会報, 第12号, 2000年4月15日, 編集責任会報編集委員会, 事務局 東京都新宿区高田馬場1—33—6, 平和相互ビル7F, 交流気付。定価300円(送料込み), 12頁。

「ノート27『民間伝承』に関する考察(2)」 獄中ノート研究会

「マラテスタとグラムシ——第三回総会記念講演『社会主義の始原』にむけて——」 戸田三三冬

読者欄「グラムシと私」 杉山永伯

論壇「グラムシ思想脱構築への疑問——石堂氏の上村氏宛書簡」 石堂清倫

「無用な誤解を避けるために——石堂氏の書簡に答えて——」 上村忠男

ビデオシアター「ニュー シネマ パラダイス」 今村夏

「グラムシのエッセンスがCD一枚に」 川口泉

巻末に都内で開かれるイタリア関係の行事や東京グラムシ会創立3周年年次大会の予告記事がある。

石堂・上村往復書簡は, マルクス・エンゲルスの「フォイエルバッハ・テーゼ」をグラムシたちイタリアのマルキストが引用しているその仕方についての二人の意見の対立をめぐる問題だが, 複雑な内容で簡単な要約が困難である。

### (8) シェリング (F.W.J. Schelling, 1775—1854)

『シェリング年報』, 創刊号, 1993年6月, シェリング年報編集委員会編集, 日本シェリング協会(事務局 大阪学院大学哲学教室)発行, 晃洋書房(京都)発行。164頁, 定価2300円。

会長西川富雄の「創刊の辞」によれば, 国際シェリング協会がレオンベルグに設立された1986年10月の6年後に日本シェリング協会が誕生した。創立時の会員数160名で, 「法学・文学・哲学・宗教・科学史等々。まさしく……インターディスプリナリィの広がりをもつての発行であった」。巻頭にフィリープ・オットー・ルンゲの油彩画「大きな朝」のカラー写真, シェリングとその生家の写真があり, 最後に日本シェリング協会関係資料と

神村恒道の編集後記がある。主要な内容は次のごとくである。

創立記念講演 シェリングと私 西川富雄

創立記念シンポジウム・シェリング哲学と現代

「意識と自然——その生ける関わりへの間で」

新田義弘

「ゲーテ形態学と自然哲学」 高橋義人

「シェリング哲学の近代性の測定——崇高と醜を試薬として——」 西村清弘

シンポジウムにおける論議 高山守・松山寿一

創立大会報告・「シェリング哲学の最近の研究動向」 藤田正勝

「初期シェリングの主体概念」 菅原 潤

「哲学のオルガノンとしての芸術——前期シェリング哲学における芸術の役割について——」

北沢恒人

「風景への応答——ロマン主義風景画とシェリングの自然哲学——」 伊東多佳子

「フリードリヒ・シュレーゲルからの接近」

酒田健一

国際シェリング協会記念講演と報告

「悪の起源から人間的自由の本質へ——超越論哲学と形而上学——」 ヴィルヘルム・G・ヤーコプス (伊坂青司・田村恭一訳)

「国際シェリング協会自由論大会参加報告」

山口和子

研究資料・「シェリング全集の現況——これまでの著作集と新しい全集の現段階——」 長島隆

シェリング文献目録(1990—1992年7月) 黒崎剛・長島隆編

この年報は毎年1回出ていて、現在第8号を準備中(7月刊行予定)である。なお晃洋書房から高山守・藤田正勝編『シェリング論集』1も刊行されている。

なおこの年報の創刊の18年前の1975年4月に『実存主義』(実存主義協会)第71号(シェリング

生誕200年記念)が発行され、13編の論文と年譜及び文献目録(1966—74)が収録されている。

(9) **ホイエルバッハ** (L.A. Feuerbach, 1804—1872)

フォイルバッハについては、船山信一のその全集訳の完成が実現されたり、山之内靖のホイエルバッハの受苦的存在としての人間観の再評価が注目されたりして、最近研究が盛んになってきているが、1987年9月に『国際ホイエルバッハ協会』が設立され、1989年11月にドイツのヴィーレフェルトで協会の第1回大会が開かれるのに呼応して、同年3月に「ウェイエルバッハの会」結成された(会長 城塚登, 事務局長柴田隆行, 幹事 石塚正英, 河上睦子, 鈴木伸一)。この会は1989年12月に明治大学で第1回の研究交流会をひらいた。そして『ホイエルバッハの会通信』を発行している——第10号, 1991年6月20日——が、事務連絡的な内容が主(ただしホイエルバッハ日本訳文献目録が連載, たとえば第10号には1990年2月—91年5月末までの文献リストあり, 第11号(1991年11月)にはプラントフォルスト, 桑山政道訳『ルターの継承と市民的解放——ホイエルバッハとドイツ3月革命前期の研究』1991年8月, 新地書房などの追加あり)で、研究活動を報道するような独立の機関誌はなく、会員の研究業績は石塚正英編集発行の『社会思想史の窓』を利用し、その62, 71, 79, 81号など(いずれも1990年発行)に随時掲載されてきた。1991年12月現在までは、事務局が朝霞市東洋大学ドイツ語研究室柴田隆行方にあつたが、柴田が国際ホイエルバッハ協会副会長に就任したため、ホイエルバッハの会の事務局も専修大学(川崎市多摩区, 専修大学9号館9706)にうつった。

『通信』第43号(2000年4月12日)文責川本隆には、ホイエルバッハ生誕200年にあるた2004年の記念出版についての総会での意見が紹介され、川本隆, 石塚正英の二名を中心に話を進めてゆくこ

と、2002年には日韓共同フォイエルバッハ研究会議を韓国で開くこと、および1999年9月25日の交流会で川本「フォイエルバッハ『ライブニッツ論』における物質について」と島崎隆「フォイエルバッハの唯物論と人間学によせて」との報告があったことが紹介され、川本の報告要旨とこれに対する討論(石塚・河上・山中隆次ら)が詳しくのっている。『通信』はこのように単なる事務的連絡だけではなく、研究室報告もふくまれるようになった。

#### (10)ポパー (K.R. Popper, 1902—1994)

*Popper Letters* (ポパーレター: 日本ポパー哲学研究会会報)

私は最近この雑誌を2冊入手し、日本のポパー研究会が1989年から活動していた(1989年10月に東大教養学部で準備会開催)ことをはじめて知った。主著『開かれた社会とその敵』の邦訳が1980年に刊行され、1992年来日した時の記念講演とともにその思想の今日的意義を分析した論文集を編集(長尾龍一・河上倫逸編)『開かれた社会の哲学』も1994年に出ている(ともに未来社)ので、日本ポパー哲学研究会が10周年をむかえ、こうした雑誌が21号も出ているのも不思議ではない。

*Popper Letters* (ポパーレター) Vol.7, No.2 (通巻 13号), 発行人 濱井修, 発行 日本ポパー哲学研究会事務局(慶応義塾大学商学部, 渡部研究室), 編集部 秋田大学教育学部(倫理学研究室, 立花希一)

1995年6月研究大会関係

「ジャーヴィー教授紹介」(英文) 小河原誠

「ポパーの科学の共和国」(訳, 小川哲生) I.

C.ジャーヴィー(トロント, ヨーク大学)

コメント(1)「方法は論理か制度か信條か」——  
島津 格

コメント(2)「Peoples Republic of Science を聴いて」 小河原誠

「ポパー研究会講演草稿」 神野慧一郎

コメント「神野講演をめぐる討論雑感」 荻原能久

作品紹介

M.H.Hacohen, *The Making of the Open Society, Karl Popper, Philosophy and Politics in Interwar Vienna*, 1993 立松希一

*Popper Letters*, vol.11, No.2 (通巻21号), 発行 研究会事務局(中央大学商学部高塚嘉一研究室), 編集 北海道大学経済学部 橋本努研究室。  
1999年研究大会から

「日本におけるポパー受容史の一側面」 小河原誠

「日本におけるポパー政治哲学の受容——その生産的発展のために——」 荻原能久

論文

「アンダーソンの反証主義」 蔭山泰之

「非決定論とカオス」 篠崎研二

書評

井上政義・秦浩起『カオス科学の基礎と展開——複雑系の理解に向けて』(共立出版 1999)  
篠崎研二

論争

「吉田論文(本誌 vol.11, No.1)で言及された拙稿批判について」 立花希一

追悼

「ジョン・ワトキンス(1924—1999)を偲んで」  
中才敏郎

その他「“Karl Popper 2002”について」や「総会等開催年表(1989—1999)」などがある。p.39と表紙裏にポパーの写真がある。

小河原・荻原両氏による日本でのポパー受容史の経緯は、彼のうけとめ方に種々のちがいが対立があることを分析したもので、私のような門外漢にとっても有益である。

ポパーについては、橋本努「ポパー」(『経済思想史辞典』, 経済学史学会編, 丸善, 2000年)を参照。

## (1)ラスキン (John Ruskin, 1819—1900)

『ラスキン文庫』(The Ruskin Library), 1934(昭和9)年11月27日創刊, 第20号1937(昭和12)年5月発刊で終刊。全20冊, 発行所東京市京橋区銀座西4丁目ラスキン文庫。印刷所世田谷の使命社, 編集兼発行者 神山興三郎, 中期以降は上村祐造。

『ラスキン文庫』は全巻現在のラスキン文庫に所蔵されているようであるが, 私は今所有している昭和12年4月号を見ただけで, その他の号については, 没後100年記念に出た *John Ruskin, A Thinker's Vision through Mikimoto Ryuzo Collection* (『ジョン・ラスキン, 思索するまなざし, 御木本隆三旧蔵書を中心に』), ラスキン文庫, 2000年, p.132の第3章「129, 『ラスキン文庫』」(鷲直仁執筆)によった。御木本はラスキン文庫について第2号(1934年12月25日)につぎのように書いている。「思想は流れ漂ふ。然し其真理の幾部分は永遠に残存する。思想自体は流行ではない。是れを流行化するの私共の罪である。銀座のラスキン文庫は凡ての点でこの流行を脱してゆきたい」。第14号(1936年5月20日)にはラスキン文庫の経営状態が苦しいことを書いた所があり, 借金で破産する昭和12年7月の3ヶ月前に発行された第19号で隆三はつぎのように書いている。「一協会の私が病死する様なことがありまして彼ラスキンの思想の力でこの仕事は残って行くことを存じて居ます」。『東京ラスキン協会雑誌』(1931年6月—37年7月)よりも3年おくれてスタートしたこの雑誌も『協会雑誌』とほぼ同時に廃刊されることになったわけである(『協会雑誌』の方は杉原『思想家の書誌』(『日外アソシエーツ』, 1990年で紹介したが, この雑誌は戦後復刊された。上掲の *John Ruskin* 参照。

手許にある『ラスキン文庫』(昭和12年4月号)は, 縦19cm, 横13cmのパンフレット型の小冊子で, 表裏の表紙を入れて16ページ。昭和12年4月25日発行, 編纂兼発行人 上村祐造, 発行所 ラスキ

ン文庫, 印刷所 使命社。表紙表に若いラスキンの半身像の写真, その裏にはラスキン画のアルプス峻峰の写真と R.M.「ラスキンを讀ふ」の詩。裏表紙にはつぎの文章が印刷されている。

ラスキン・ライブラリー }  
ラスキン・ホール } の行く道  
ラスキン・カティジ }

銀座街に出たこれ等は, コニストン湖畔のラスキン・ミュージアムの如く, 又ラスキンのかつて開いたロンドンのラスキン・ティー・ハウスの如く, 北英に尚現存するラスキン手工業の片影たるラスキン・リネン・インダストリーの小販売所の如くでなければならぬと存じます。

これ等は雜然たる銀座街にも適應せねばならず, 又ラスキンの生誕地や, その臨終の家ブランドウッドの一室の如くでもなければならぬのです。

ラスキン学の一部に行くのではあるけれども, 彼の残せる偉大なる思想を害してはならないので, この仕事は, 少なくとも仲々むづかしいことと存じます。何とかして無事に行くためには, 皆様の深き御同情とお援けによる他ありません。なお裏表紙の表にはラスキン・ホールの室内の写真と文庫, カティジ, ホール, カティジの住所(いずれも東京市内)が記されている。

本文には最初に御木本隆三「明治38年のラスキン——我が国におけるラスキン伝来史の一頁」があり, 正岡芸陽『文豪ラスキン』(明治38年2月)が最後の章「ラスキン論」を中心に紹介され, 「この書がどのラスキン伝を底本として著されたものかは不明であるが, また, この著者正岡芸陽氏についても明らかでないが, 当時ゲーテ, カーライル, トルストイ, エマーソン等が何れも紹介されておったのに, ラスキンのみは余り普及されておらなかったかの観があった。しかし本書のごとき解説者の評伝が刊行されていたことは, 私にとって愉快的発見であった」とのべられている。つぎに林久一「生活の中から」があり, 近く上高地に

近代的ホテルがひらかれるので、そのホテルの営業されぬ冬の期間「私の住宅を利用しての純喫茶店を山の中で開いて」それにラスキン・カテーザ(またはルーム)の名を冠したいと書いている。本書にはこの他に、書斎のラスキンの写真、彼の描いた Lake of Brienz の画、「男性の力と女性の力」についての彼の言葉などがのっている。

(12)ロマン・ロラン (Romain Rollan, 1866—1944)

以前私は『ロマン・ロラン研究』(ロマン・ロラン協会)を紹介した(『思想家の書誌』, 177—178頁)が、ここではこれとは別の雑誌をとりあげる。

『ユニテ』, 20号記念特集, 1993. 3, ロマン・ロラン研究所(理事長 尾埜善司, 京都市左京区銀閣寺前町32) 発行。

本誌は1950年11月日本ロマン・ロラン友の会(会長 片山敏彦・副会長 宮本正清)の機関誌として創刊, 1966年第2期第4号(通算第19号)で休刊となったが, 1971年に宮本正清が財団法人ロマン・ロラン研究所を設立, それを発行母体として『ユニテ』復刊第1号を1973年11月に刊行した。

第20号は76頁で, 編集後記に, 1992年11月に宮本正清の没後10年記念講演会を盛大に開催したことが, 本号はその特集として講演内容を収録したこと, 研究所は公開講座や読書会研究会(すでに152回開催)をひらいて活動してきたことがしるされている。宮本追悼の三講演, 「静かにやさしき顔」佐々木斐夫, 「ふしぎな静けさ——宮本正清の世界——」小尾俊人, 「宮本正清さんと一人の学生」尾埜善司, 第150回例会報告「ベートーヴェンと私」河合一穂の他, つぎの文章がのっている(記念講演会での講演内容)。

「『大洋感情』と宗教の発端」 岩田慶治

「ロマンとイタリア」 戸口幸栄

「ロマン・ロランの革命劇をめぐって」 鶴

見俊輔

鶴見はロランのスターリン批判や青年時代ロマ

ンの『クレランボー』を訳した大仏次郎の自由主義・平和主義が本物であったことをのべたあと, 『獅子座の流星群』をとりあげ, 「フランス革命の失敗はフランス人のその後にどのように受け継がれたかという問題を, ロランは革命劇を通して1930年代のフランス人の前に置いた」とのべ, そして鶴見は1991年にロシアが消えたからといって社会主義が駄目でやはり資本主義でなくてはという風にだけ考えるとすれば, それは私たち日本人の大正以来の進歩思想(鶴見によれば, 日本でロランの人気のピークは大正10年頃)は, 結局ソ連の国家主義に翼賛するだけのものだったという事を裏づけるといい, そしてソ連が無くなった今, 社会を作り変えようとする理想そのものが衰えているという事実をはっきり見たほうがいと論じている。

『ユニテ』第21号, 1994. 5. 17頁。『魅せられる魂』の第二巻『夏』の中にあるアンネットの詩のロラン自筆の写真を表紙に, 片山敏彦訳を巻頭におさめてある。本文にはつぎの三つが収録されている。

「『魅せられたる魂』を語り終えて」 重本恵津子

「いま, ロマン・ロランを語る」(続) 尾埜善司

「いま, ロマン・ロランを語る」 今江祥智  
巻末に「あとがき」とロマン・ロラン没後50年記念の催し(関西日仏会館で1994年9月～95年1月)のプログラムがのっている。なお, 『ロマン・ロラン研究』の方は第20号(通巻140号)の特輯「ブレヒトとロラン」(1983年4月8日)で終刊となったようである。また『片山敏彦文庫だより』(片山敏彦文庫の会)が1993年10月に創刊され, 第2号(1994.10)に「ロマン・ロラン没後50年に因んで」が片山の四つの文章で編集されている。

## むすび

以上本稿で私は研究雑誌を12人の思想家につい

て合計13種を紹介してきたが、その他の思想家たちの研究雑誌についての断片的な情報を手持ちの資料によっていくつか紹介しておく。

『スピノザ協会会報』については『社会思想史研究』第13号225頁で第1, 2, 3号の3冊(1990年)を紹介したが、第11号(1994年7月12日)、第13号(同年8月10日)、第14号(1994年12月14日)、第18号(1995年11月2日、事務局岩槻市浮谷334-3、目白大学人文学部工藤喜作研究室)が出ている。だが事務局は今年4月から東京駒場の東大教養学部柴田寿子研究室にうつった。ただし会報の印刷・送付などの事務一般についてはあきる野市秋川4-3-7、高木久夫の担当となった。なお第14号には全員名簿がのっている。

『松浦武四郎研究会雑誌』第8・9合併号は、同研究会(札幌市東区北18東18、栄調査設計事務所内)から、1988年12月に刊行されたが、これは松浦武四郎(1817-1888)の没後百年記念特輯として出されたものである。21人が執筆、大版60頁、定価1000円であった。

中野重治の研究雑誌として『中野重治研究月報』(『社会思想家研究』第15号)と『中野重治研究会会報』(本誌48-1)を紹介したが、最近つぎの雑誌の存在を知ったが実物未見。『梨の花通信』、中野重治の会、東京都港区御金台1-2-37、明治学院大学満田郁夫研究室内、第34号(2000年3月)、頒価500円。また最近北九州市の松本清張記念館から『松本清張研究』(年刊)が創刊された(創刊準備号、1999, 3; 第1号、2000, 4)。第1号の特輯は「清張と鷗外」で、開館一周年記念シンポジウムの講演三篇の外、新資料紹介や研究論文4篇がおさめられている。なおこの雑誌とは別に『松本清張研究』が砂書房(東京都文京区本郷3-13-5、13番5号館ビル3F)から出ている(創刊号1996年9月、第5号1998年8月)が未見である。

後記 資料蒐集上つぎの方々にお世話になったことを記して深謝する次第である。五十嵐稲子、石塚正英、尾埜善司、川西重忠、木村正身、柴田隆行、田口昌樹、朝長梨枝子、村山盛嗣、田畑稔、山下重一、山本鎮雄。